国際言語文化研究所萌芽プロジェクト B6
学習英文法研究会研究報告「学習英文法を巡って（2）」

周辺的な接続詞 lest について：語彙文法的視点からの記述

滝沢直宏

Abstract

This paper is an attempt to describe the peripheral conjunction “lest” found in present-day English from a lexico-grammatical point of view as adopted in Sinclair（1991）and others. This conjunction has not been satisfactorily described in currently available grammar and usage books, with the notable exception of Peters（2004）. Huge-sized English corpora are used to create several lists of frequently occurring word sequences（ngrams）which contain this conjunction. Some hitherto not thoroughly uncovered phraseological units of this conjunction are presented. In addition, the important role played by the verb “forget”（with a comma immediately following the verb）for the units are pointed out. These units are found to be not limited to “formal written style.” We also discuss, in more general terms, the importance of the lexico-grammatical point of view in improving the descriptions currently found in pedagogical grammars.

キーワード：接続詞 lest，“lest ... forget,”，“in case”，語彙文法的言語観，定型パターン

1. はじめに

一般的に，語彙と文法は，二分法的に考えられがちである。しかし，言語の使用実態を見ると，両者を完全に二分することは適切でない。語彙と文法の間に関連性を認め，両者を密接な関連性をもつものとして捉える語彙文法的言語観（lexico-grammar 的な言語観（Sinclair（1991），Hunston and Francis（2000），Partington（1998），Tognini-Bonelli（2001）などを参照）は，適切な言語記述の観点から重要なだけでなく，学習者が自然な言語表現を実現する上において重要であり，学習英文法の観点からも注目に値する。

例えば，foggy と foggiest は，同じ形容詞の原級と最上級の関係にあり，同一の文法的環境に生じると考えがちである。しかしながら，潜在的可能性ではなく実際の使用実態から見ると両者はかなり異なる文法的環境に現れる傾向がある。具体的には，原級の foggy は，後ろに day/morning などの名詞を伴い，前には不定冠詞 a が現れる。そして，「a foggy 名詞（day/morning など）」という名詞句は，全体として on/in などの前置詞によって導かれる前置詞句内に生じやすい。on a *foggy* day のような使い方である。一方，最上級の foggiest は，後ろに idea/notion な

どの名詞を伴い，前には定冠詞 the が現れる。そして，「the foggiest 名詞（idea/notion など）」という名詞句は，全体として ”don’t have/haven’t” の後ろに生じやすい。”I haven’t the *foggiest* idea where he is.” のような使い方である。この例は，文法範疇が同じく形容詞だからといって，それが用いられやすい文法的環境まで同一とは限らないことを示す一例である。文法範疇で見るのではなく，foggy と foggiest という語形で考えることの重要性を示唆している。

別の例を見る。fall という動詞は主語として dusk をとることができる。そしてそれが過去時制で ”dusk fell” として使われると，as 節を筆頭に when/until 節という副詞節の中で用いられやすいという特徴が生じる。これは，「主語＋自動詞」が，用いられている語の連鎖によって，現れやすい文法的環境に影響が生じることを示す例である。

このように見ると，学習英文法の考察においては，文法を独立したものとしてではなく，語（更には特定の語形）と文法的特徴を分かち難いものとして考えるべきであり，その視点が自然な言語表現を生むために必要不可欠なものであると言える。

本稿では，このような視点から学習英文法の中で無視されているわけではないが十分な扱いを受けているとは思われない周辺的接続詞の lest の現代英語における用法に光をあてる[1)]。

2. 現代英語における接続詞 lest の使用実態

接続詞 lest は，約 140 億語という膨大な語数（書籍に換算するとおよそ 14 万冊分に相当）をもつコーパス iWeb に 54,419 回，現れている（数値は大文字表記と小文字表記の合算，以下，特記しない限り同様）。同コーパスにおいて，基本的な接続詞である although，though，because および lest と同様に周辺的と見なすことができる接続詞 albeit の頻度を比較のために以下に示す。

because	13,197,702
though	4,782,754
although	2,944,896
albeit	116,122
lest	**54,419**

ここで「周辺的」とは，頻度が低く，したがって，学習英文法の範囲ではあまり重視されてきていないという意味に加え，同じ範疇（lest の場合には接続詞）に属する語の中で中核的な語とは何らかの点で異なる振る舞いをするという意味である。albeit よりも更に頻度が低いという点を考慮しても，lest は周辺的であると見なして良い。滝沢（1996, 2019）では，接続詞 albeit について論じたが，本稿では，現代の普通の英文において lest が一定数，使われており，したがって高校段階でも目にする可能性が高い接続詞であるという事実に鑑み，現代英語におけるその用法を取り上げることとした。（学習参考書には，より頻度の高い albeit への言及はない一方で，lest には言及しているものが多い。仮定法現在が使われるという点で記述が必要であるとの判断も働いていると思われる[2)]。）

3. lest の 2 つの用法

lest には大別して 2 つの用法がある。Peters（2004）の用語を使えば，”a negative purpose” を表す用法と ”a fear of some kind” を表す用法である。現代英語において一般的なのは前者の用法で，本稿ではこの用法を中心に述べるが，その前に後者の現状を把握しておく。後者は，以下のような文によって例示される（下線・太字は引用者）。

（1）The scene is closed, and we are no longer anxious **lest** misfortune should sully his glory.（iWeb）
（2）So often we are so concerned **lest** somebody think something wrong about us.（iWeb）
（3）But if I ‘m a knifesman, I should greatly fear **lest** one become compulsively hysterical given such an order.（iWeb）
（4）I have had my fears **lest** this control should infringe the freedom of elections, which ought ever to be held sacred.（iWeb）

これらの例文において，lest は動詞・形容詞の補部または同格名詞節を導いており，現代英語では that 節によって導かれるのが普通である。ここでは，iWeb に加え，約 4 億 4,000 万語のアメリカ英語のコーパスである COCA，そして 1810 年から 200 年間の英語を収録している COHA のうち 19 世紀の英語を抽出した資料（以下，COHA-19）における ”a fear of some kind” を表す用法の頻度を確認しておく。この用法に限定して全ての例を網羅的に調査することはできないので，ここではこの用法の lest をとる anxious，concern（concerned/concerns），fear（feared/fears）を調査の対象とする。その際，現代英語で通例用いられる接続詞 that との頻度差に注目する。具体的な処理方法と結果は以下の通りである。

perl -ne ‘while（/\b（anxious|concern（ed|s）?|fear（ed|s）?）（lest|that）\b/gi）{$a = lc $&; print “$a\n”}’ *in_file* | sort | uniq -c（*in_file* = iWeb/COCA/COHA-19）

表 1：COHA-19/COCA/iWeb における ”anxious lest/that” の頻度と lest の占める割合

コーパス	COHA-19	COCA	iWeb
anxious lest	33	6	83
anxious that	286	98	2,060
lest の占める割合（%）	**10.3**	**5.8**	**3.9**

表 2：COHA-19/COCA/iWeb における ”concern（ed/s）lest/that” の頻度と lest の占める割合

コーパス	COHA-19	COCA	iWeb
concern（ed/s）lest	15	12	153
concern（ed/s）that	103	7,300	122,854
lest の占める割合（%）	**12.7**	**0.2**	**0.1**

表 3：COHA-19/COCA/iWeb における "fear（ed/s）lest/that" の頻度と lest の占める割合

コーパス	COHA-19	COCA	iWeb
fear（ed/s）lest	288	7	1,130
fear（ed/s）that	3,155	7,507	87,254
lest の占める割合（%）	**8.4**	**0.1**	**1.3**

これらの表を見れば明らかな通り，19 世紀の英語（COHA-19）では，10% 前後の割合で使われていたこの用法の lest が，現代の英語では，lest の占める割合がかなり下がり，that の占める割合が相対的に高まってきている。古風というラベル付けがなされることも納得がいく。

4. lest の副詞節を導く用法

現代英語においてより一般的な "a negative purpose" は，次の文で例示されるような副詞節を導く用法を指す。

（5）Liberal commitment must also be tested, **lest** it become an orthodoxy.（Peters（2004: 319））

本稿では，lest の副詞節を導く用法のみを検討する。（諸学習参考書が取り上げている用法も副詞節を導く用法のみである。）

4.1. 先行文献における記述

本節では，先行文献における記述を確認する。

lest は，ほとんどの文法研究書・語法研究書において扱われている。そのごく一部を取り上げる。例えば，江川（1991: 250）は，Quirk *et al.*（1985: 158）の "This *lest* construction is restricted to very formal usage in BrE, but is more current in AmE." という記述に言及し，「lest- 節について Quirk（*CGEL*，§ 3.61 は「<< 英 >> では非常に改まった英語に限られているが << 米 >> ではそれほど限定されていない」と言っているが, << 米 >> でも文語の語法であることには変わりはない。」と述べている。多くの文献において指摘されているように，イギリス英語よりもアメリカ英語において普通に用いられるものの，アメリカ英語でも「文語」の語法であるという指摘である。

辞書に目を向けると，Cobuild9 は，文体ラベルを FORMAL とし，以下の 2 例を挙げている（p. 868）。いずれも "a negative purpose" を表す用法の例であり，"a fear of some kind" を表す用法を示す例示はない。これは前節で見た現代英語の状況を考えれば，学習者用辞書の記述としては納得がいく（但し，英和辞典（例えば，G5 や W4）には両方の用法が記述されている）。

（6）I was afraid to open the door lest he should follow me ...,
（7）And, lest we forget, Einstein wrote his most influential papers while working as a clerk.

なお，2 つの例文のうち（6）は should を伴う用法であり，諸文献にもある通り主にイギリス用法である。一方，（7）は仮定法現在が使われているので，同じく諸文献によれば主にアメリ

カ用法であろう。しかし，この辞書では地域的な差異には言及していない。Quirk *et al.*（1985: 565）は，この用法の lest についても，”formal（as well as rather archaic）” と述べている。

語法書の中では Peters（2004: 319）が，以下に引用するように，極めて妥当な記述をしている。

> In the US, **lest** has been in continuous standard use through to the present day. In the UK it was on the stylistic margins in mid-C20, as shown by parallel databases of the 1960s, where it was five times more common in American than British English. It probably was “formal or archaic” then, as the *Comprehensive Grammar*（1985）declared. But BNC data from the 1990s shows a sea change in the UK, with hundreds of examples of **lest** from a variety of written texts. So its stylistic status in British and American English is much the same at the start of C21.

また Peters（2004: 319）は，”Lest anyone think that ...” や ”Lest it be assumed that ...” のような表現を挙げ，アメリカ英語において「文頭で使われる」傾向に言及している。

一方で，Swan（2016: 509）は，”negative purpose” を表す用法のみを取り上げ，”rare in British English, and is found mostly in older literature and in ceremonial language. It is a little more common in formal American English.” と述べ，should のある例とない例（仮定法現在の例）を挙げている（Swan 初版には lest 自体の記述はない）[3)]。アメリカ英語であっても formal な文体においてより用いられているとの指摘である。

以上，諸文献の記述を検討すると，lest の実態の記述に関しては，Peters（2004）とそれ以外で大きな相違が見られることが分かる。そして，第 5 節で検討するように，Peters（2004）の記述が最も実態に合っているように思われる。

4.2. 学習参考書における記述：文体に関する記述の検討

本稿は，学習英文法に関するプロジェクトの報告論文であるので，高校生が使う学習参考書にも目を向ける。

『ジーニアス総合英語』（p. 484）は，副詞節を導く用法の lest について「非常に堅い書きことばで使われる」としつつ，以下のような平易な一例を挙げるにとどまっている。

（8）Make a note of it **lest** you（should）forget.

この例文は，むしろ話し言葉でこそ使われるような内容である。また，後述の通り，COCA の spoken には，lest の使用例は 133 件，見られるので，他のジャンルに比べ少数とはいえ，「非常に堅い書きことばで使われる」という説明にはやや疑問を抱く。

『新エスト総合英語』（p. 505）は，以下の例を挙げている。文体に関する記述はない。

（9）He closed the window **lest** the wind（**should**）**blow** away the papers.

『総合英語 Forest』（p. 138）は，「文語的な表現で，アメリカ英語では should を用いずに，動詞の原形を用いることが多い。」とし，以下の例を挙げている。

（10）Keep quiet **lest** you **should** wake the baby.

その上で，『総合英語 Forest』（p. 607）は，「lest ... should ～は「・・・が～しないように」という意味を表すが，文章体のかたい表現である。なお，lest が導く節では should を用いるが，アメリカ英語では should を用いず動詞の原形が来ることが多い。」とし，以下の文を挙げている。

（11）Speak quietly **lest** they **should** hear us.

上記の通り，『総合英語 Forest』では「文章体のかたい表現」という文体的特徴に言及している。ただ，挙げられている例文は平易であり，日常的な内容である。

学習参考書の場合，主な対象は高校生なので，平易な例文でないと読者に分かりにくいという配慮があることは容易に想像できるものの，「非常に堅い書きことば」「文章体のかたい表現」とする記述と挙げられている例文との間にやや齟齬が感じられる。

5. コーパス調査と定型化したパターンを認定するための ngram の作成

本節では，iWeb, COCA, COHA の 3 コーパスを用い，lest の歴史的変化と現代英語における実態を探る。iWeb を利用する理由は，規模が約 140 億語と巨大であり，lest が生じる定型化されたパターン（以下，「定型パターン」と呼ぶ）を見出すには有益であると考えられるからである。COCA は，語数こそ iWeb と比較して小規模ではあるが，5 つのジャンルに分かれており，ジャンルによる差異を捉えられる点が特徴的である。COHA は，歴史コーパスであって，lest の歴史的変化を探るのに有益である。

まず，COCA における総計と各ジャンルの lest 単独の頻度を示す。

COCA 全体（2,007 件）
COCA:academic（513 件）　COCA:fiction（588 件）　COCA:newspaper（267 件）
COCA:magazine（506 件）　COCA_spoken（133 件）

ここから，ジャンルによって頻度に差はあるものの，「非常に堅い書き言葉で使われる」と言われる lest が話し言葉（spoken）においても，一定数，使用されていることが確認できる。

その上で，用法上の特徴を見るために，全体および各ジャンルの ngram も作成し，そのうちの特に 3gram を提示する。ngram とは，n 語の連鎖のことであるから，3gram は 3 語の連鎖ということになる。Biber *et al.*（1999, Chapter 13）は高頻度な定型パターンを ”lexical bundle” という名称で呼んでいるが，3gram 作成の目的も ”lexical bundle” を認定することにある（Biber *et al.*（1999）のいう ”lexical bundle” は，”bundles of words that show a statistical tendency to

co-occur”（p. 989）であり，3gram は ”three-word lexical bundle” と呼ばれている）。（なお，八木・井上（2013）も，定型パターンについて重要な示唆を与えてくれる。）

以下では，COCA 全体については頻度 20 以上の連鎖，各ジャンルについては頻度 5 以上の連鎖を示すこととする（降順，以下，同様）。（ngram は，Perl の簡単なスクリプトと Linux の標準的なコマンドを組み合わせて作成した。この作業においては，文頭用法にも注目するため，大文字・小文字は別扱いにしている。区切り文字は空白文字としているので，記号類（コンマなど）は，直前の語と共に出力される。そして，作成された 3gram の中から，lest を含むものを抽出している。左端の数字が頻度である。）

COCA 全体（2,007 件）

46 lest they be
34 Lest you think
26 lest you think
25 lest he be
23 lest we forget,
20 lest it be

COCA:academic（513 件）

11 lest they be
7 lest it be
7 <p> Lest we
6 <p> Lest I
5 Lest I be

COCA:fiction（588 件）

15 lest they be
7 lest he be
6 lest there be
6 lest it be
6 lest he get
6 lest I be

COCA:newspaper（267 件）

9 Lest you think
9 <p> Lest you
8 lest they be
7 <p> Lest anyone
5 lest we forget,

5 Lest we forget,

COCA:magazine（506 件）
18 Lest you think
11 lest they be
8 lest you think
8 lest we forget,
8 lest he be
6 <p> Lest you

COCA_spoken（133 件）
16 lest you think
7 lest we forget,
5 And lest we

上記のデータを見ると，以下の点に気付く。

(i) 段落の区切りを示す <p> が先行する用法や Lest の L が大文字になっていて文頭で使われる用法（文頭用法）が目立つこと。
(ii) ジャンルによって違いはあるものの，全般的に見れば，一般動詞として lest 節内に生じる動詞は，forget/think が目立つこと。

(ii) で述べた特徴についてであるが，特定の接続詞が特定の動詞と共に使われることは他の接続詞の場合には見られない特徴である。lest が語彙的に偏った使われ方を示していると考えることができる。（特定の前置詞が特定の名詞句を従える例としては，”*bar* none”, “*failing* that” の例がある。）

この種の連鎖は，COCA に限ったことではない。iWeb においても 3gram を作成し，頻度 500 回以上の連鎖を以下に示す。

1116 lest they should
878 lest they be
854 lest he should
668 Lest you think
627 lest you think
596 lest we forget,
570 lest you be
511 lest we forget

ここでも，think/forget が高頻度の動詞であることが確認できる。think は圧倒的に that 節を従え，その内容は様々であるが，一方で，forget は後ろに別の要素を従えず，単独用法で使われることがある。実際，lest を含む 3gram では，forget の直後にはコンマ（あるいはピリオドや感嘆符）が使われることが多く，現代英語において lest が使われる定型パターンとして，”lest ... forget,” が見えてくる。iWeb において頻度 10 以上の連鎖を示す。

596 lest we forget,
511 lest we forget
310 Lest we forget
252 Lest we forget,
102 lest you forget
91 lest we forget.
58 lest I forget
55 Lest we forget.
47 lest I forget,
42 lest you forget,
40 forget God, lest
25 lest thou forget
24 lest we forget!
22 lest they forget
18 lest you forget.
17 lest anyone forget
15 Lest you forget
14 Lest you forget,
14 Lest I forget
13 lest not forget
12 lest anyone forget,
11 Lest I forget,
10 lest ye forget

”lest ... forget,” という連鎖は「忘れるといけないから念のために書いて・言っておきますが」という意味を表すための用法で，その内容は平易である。主語には we/you/anyone が頻用される。「特定の連鎖で生じやすい」という点が学習英文法においては重要である。既存の文献でも，”lest ... forget,” の例文を挙げているものもあるが，この動詞が他の動詞と比べて目立って使われている事実に明確に言及している文献はないと思われる。そして，独立用法の forget を伴うこの連鎖が 19 世紀末には使われるようになっていたことは，OED が引く以下の例文によっても窺える（下線は引用者）。

(12) 1897 R. Kipling *Recessional* in *Times* 17 July 13/6 Lord God of Hosts, be with us yet, Lest we forget—lest we forget!

6. forget の用法に関する歴史的変化

forget の後ろに NP や that 節・whether/if 節，PP が来ていれば，直後にスペースが来ることが想定される。一方，forget の単独用法の場合，直後にコンマなどの記号類が来ると考えられる。そこで，lest 節中で使われる forget の直後の要素（スペースかコンマか）を見る（lest と forget の間には任意の一語を想定している。以下も同様）。併せて，比較の目的で forget 単独の直後の要素（スペースかコンマか）も見る。

表 4：iWeb/COCA における "lest ... forget" の直後に現れるスペースとコンマの頻度およびコンマの占める割合

コーパス	iWeb	COCA
スペース	1,749	33
コンマ	1,355	48
コンマの占める割合	**43.7**	**59.3**

併せて，比較の目的で forget 単独の直後の要素（スペースかコンマか）も示す。

表 5：iWeb/COCA における forget の直後に現れるスペースとコンマの頻度およびコンマの占める割合

コーパス	iWeb	COCA
スペース	761,650	23,824
コンマ	30,692	1,680
コンマの占める割合	**3.9**	**6.6**

"lest ... forget" 内ではおよそ半数が直後にコンマを伴う（表 4）が，その環境指定を外すと，forget の直後にコンマが来るのはおよそ 5% に過ぎない（表 5）ことが判明した。

次に COHA によって，歴史的変遷を見る。

表 6：COHA（19 世紀，20 世紀前半，20 世紀後半以降）における "lest ...forget" の直後に現れるスペースとコンマの頻度およびコンマの占める割合

年代区分	19 世紀	20 世紀前半	20 世紀後半以降
スペース	4	17	6
コンマ	0	5	8
コンマの占める割合	**0.0**	**22.7**	**57.1**

表 7：COHA（19 世紀，20 世紀前半 , 20 世紀後半以降）における forget の直後に現れるスペースとコンマの頻度およびコンマの占める割合

年代区分	19 世紀	20 世紀前半	20 世紀後半以降
スペース	10,119	8,922	10,334
コンマ	824	593	629
コンマの占める割合	**7.5**	**6.2**	**5.7**

ここから，”lest ... forget” という環境では，コンマが直後に来る用法は 19 世紀には皆無であるが，20 世紀前半には 22.7%，そしてそれ以降，2009 年までの資料では，実に 57.1% という半数を超える割合で，コンマを伴うことが見て取れる（表 6）。（但し，用例数が十分とは言えないので，今後，より規模の大きな資料での検証が必要である。）一方，単独用法の forget を見ると，1810 年からの 200 年間において，大きな違いは見られない。コンマが直後に来る用法は 6% 程度である（表 7）。”lest ... forget” の環境で使われる forget は後ろに要素を従えることがあまりなくなってきていることが窺え，それはすなわち，”lest ... forget,” としてのパターンの確立を意味する。（lest と forget の間には，we/you/anyone などが生じる。）lest が，節としての自由度を失い，固定化していると言える。いくつか「堅い」とは思えない例を示す（下線は引用者）。この中で，（13）は spoken が出典であるから明らかに話し言葉であり，（14）は fiction が出典だが，引用符に囲まれており，話し言葉である。（15）は文末での用法だが，forget の単独用法の例に変わりはないので，ここに挙げておく。

（13）<u>And lest we forget,</u> the US also won medals in nine of the 10 Olympic sailing events this week.（COCA: spoken）

（14）“<u>And lest you forget,</u>” he said, “I've been riding every day since I was five. It is experience that makes for good horsemanship.”（COCA: fiction）

（15）“The customer is boss,” he stated several times during his presentation, <u>lest anyone forget.</u>（COCA: magazine）

従属接続詞は「節」を従えるという理解では，意味的に整合性がある限り，どのような内容の節でも来ることができることを意味する。しかし，これでは，具体的な読解・作文・表現活動には十分な情報とは言えない。英英辞典，英和辞典には，頻繁に使われる表現が示され，場合によっては太字などで強調されているが，他の表現があまり使われないことまでを学習者が読み取ることはできない。教える側は，典型例と非典型例とを峻別して理解しておく必要があると思われる。

7. in case および forget の連鎖

学習参考書も含め，lest の代用として ”in case” が使われるという指摘がなされている。これは事実である。実際，iWeb において，54,419 件の lest に対して ”in case” は 490,888 件出現し，およそ 9 倍という圧倒的な頻度である。この数値は，単純な検索によるものであり，”in case of ...” のように明らかに節を従えない用法も 105,658 件，含まれている。これを除いた 385,230 件で見ても，lest のおよそ 7 倍，出現している。

ここで比較のため，iWeb の ”in case” の 4 語の連鎖（4gram）を作成する。lest の場合より 1 語多いのは，”in case” が 2 語から成っているからである[4)]。

12970 just in case you
12249 in case of a
9143 in case you need
9134 in case of an
6543 in case you want
6460 in case you are
6222 just in case. <p>
6026 in cases where the
5383 in case you have
（頻度 5,000 以上）

”in case” の 4gram の中から forget を含む行を抽出すると，以下のようになる。

701 in case you forget
163 in case I forget
95 in case you forget.
61 In case you forget
55 in case they forget
35 in case I forget.
24 in case you forget,
14 in case we forget
13 in case I forget,
11 in case they forget.
11 In case I forget
（頻度 10 以上）

p. 21 で示した forget を含む lest の 3gram のリストと比較して読み取れるのは，iWeb において，”in case” の場合の forget との共起は lest の場合ほど目立っておらず，特にコンマを伴う ”lest ... forget,” と ”in case ... forget,” を比較すると，lest の使用が圧倒的であるということである。この点からも，lest における ”lest ... forget,” という定型パターンが際立ってくる。

次に ”in case” を離れ，iWeb における forget 自体の 3gram を見る。”forget,” を含む 3gram を頻度順に示すと以下のようになる。

1107 will never forget,
997 forget, you can
842 forget, if you
813 And don’t forget,
596 lest we forget,

556 don't forget, you
527 never forget, "
509 easy to forget,
（頻度 500 以上）

ここで注目すべきは，"lest we forget," が 5 位に来ているということである。低頻度である lest が，"forget," という特定の語との共起という観点から見ると，高頻度の接続詞として立ち現れるわけである。

以上，本節では，様々な観点から，lest と forget の相性の良さを見た。

8. 有名な表現に基づく拡張

前節までに見た "lest we forget" は，戦没者追悼の文脈で頻繁に見られるものである（wikipedia, "lest we forget", 2020 年 5 月 1 日閲覧）。表現の初出は Rudyard Kipling の "Recessional"（1897）という詩である（同）。"lest we forget" に限らず，ある表現が作られ，それが高頻度に使われているうちに，表現を構成する一部の語が入れ替えられて使われることはよく見られる現象である。例えば，1709 年の Susanna Centlivre の劇 *The Busie Body* で初めて用いられている "But me no buts." という表現がある（wiktionary, "but me no buts", 2020 年 5 月 1 日閲覧）。ここでは，But は「But と言う」と意味の動詞（命令形）であり，buts は名詞である。これが一般化して，X me no Xs. というパターンが出来上がり，X の位置には様々な範疇の語が生起可能になっている。例えば，"If me no ifs." や "Uncle me no uncles." のような文が可能である。"lest we forget" に関しては，主語が you/anyone にも拡がっている状態である。また，ある程度の自由度を獲得した時には，特定の文脈に限定されない一般性をもった表現として使われるようになることも，よく見られる現象である。実際，（13）-（15）は，戦没者追悼には関係なく，また詩的でも全くない。そして，自由化が一層進み，lest 自体の使用頻度が増加し，文体的偏りが更に取り払われていく可能性もある。

9. まとめ

本稿では，語彙と文法を分離せず，両者を密接な関連性をもつものとして捉える語彙文法的言語観の下，周辺的でありながらも高校段階でも目にする機会がある接続詞 lest について記述した。この接続詞は，forget という動詞と共起傾向があり，従来，言われてきたような「堅い書き言葉」でなくても，"lest we/you/anyone forget," のような定型パターンとして，それなりの頻度で使われることを述べた。こうした傾向を捉えるには，母語話者の直観では困難なことも多く，コーパス（可能な限り巨大なコーパス）を用いることで，慣用の姿を見る必要がある。コーパス利用の方法は様々であるが，本稿では特に，ngram の手法を用いた。また，有名な表現に基づく拡張の可能性についても言及した。

注

＊本稿執筆に際し，高校での英語教育歴の長い西脇幸太氏から有益なコメントを頂戴した。記して，謝意を表する。言うまでもなく，本稿における不備はすべて筆者の責任による。

1）Lopéz-Couso（2007）は，lest を正面から扱っている数少ない論文の一つであるが，あくまで英語史の中での通時的変化に力点が置かれているので，主として現代英語での実態を扱う本稿とは視点が異なる。

2）Huddleston and Pullum（2002: 187）は "..., *should* is a somewhat less formal alternative to a plain form ..." としている。"a plain form" とは，仮定法現在の形態を指している。

3）lest に関する限り，Swan（2016）の記述は，Swan（2005）と全く同一である。

4）COCA においては，in case は 8,322 件，出現し，内 1,225 件が of を伴うものである。lest は 2,007 件であるから，およそ 4 倍（of が伴う用法を除くと，3.5 倍）である。

参考文献

Biber, D., S. Johansson, G. N. Leech, S. Conrad and E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education.

江川泰一郎 . 1991.『英文法解説』改訂三版 . 東京 : 金子書房 .

Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hunston, S. and G. Francis. 2000. *Pattern Grammar: A Corpus-Driven Approach to the Lexical Grammar of English*. Amsterdam: John Benjamins.

Lopéz-Couso, M. J. 2007. "Adverbial connectives within and beyond adverbial subordination: The history of *lest*," in Lenker, Ursula and Anneli Meurman-Solin（eds.）*Connectives in the History of English*. pp. 11-29. Amsterdam: John Benjamins.

Partington, A. 1998. *Patterns and Meanings: Using Corpora for English Language Research and Teaching*. Amsterdam: John Benjamins.

Peters, P.（eds）. 2004. *The Cambridge Guide To English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Sinclair, J. 1991. *Corpus, Concordance, Collocations*, Oxford: Oxford University Press.

Swan, M. 2005. *Practical English Usage*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.

_____. 2016. *Practical English Usage*. 4th ed. Oxford: Oxford University Press.

滝沢直宏 . 1996.「接続詞 albeit をめぐって」『言語文化論集』（名古屋大学言語文化部紀要）XVIII,1: 41-55.

滝沢直宏 . 2019.「現代英語における albeit の振る舞い」現代英語談話会（編）『英語のエッセンス』pp. 39-49. 大阪 : 大阪教育図書 .

Tognini-Bonelli, E. 2001. *Corpus Linguistics at Work*. Amsterdam: John Benjamins.

八木克正・井上亜依 . 2013.『英語定型表現研究―歴史・方法・実践―』東京 : 開拓社 .

辞書

井上永幸・赤野一郎（編）. 2019.『ウィズダム英和辞典 第 4 版』東京 : 三省堂 .［W4 と略記］

Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary. 9th ed. 2018. Glasgow: Harper Collins Publishers.［Cobuild9 と略記］

南出康世（編）. 2014.『ジーニアス英和辞典 第 5 版』東京 : 大修館書店 .［G5 と略記］

Oxford English Dictionary. Oxford: Oxford University Press. Online 版 . 2020 年 5 月 1 日アクセス .［OED と

略記］

学習参考書

石黒昭博（監修）. 2017.『総合英語 Forest』第 7 版 . 東京：桐原書店 .
釜池進（監修）・戸板洋市（編著）. 2014.『新エスト総合英語』四訂版 . 京都：エスト出版 .
中邑光男・山岡賢史・柏野健次（編）. 2017.『ジーニアス総合英語』東京 : 大修館書店 .

コーパス

Corpus of Contemporary American English（COCA）の full text。本稿では，この COCA（full text）のうち 1990 年から 2012 年までの 4 億 4,000 万語から成るテキストを使用する。［COCA と略記］
Corpus of Historical American English（COHA）の full text。［COHA と略記］
iWeb Corpus の full text。［iWeb と略記］